

# 第4回WHO経穴部位国際標準化特別会議報告

第二次日本経穴委員会作業部会委員 坂口俊二

2006年10月30日～11月1日、つくば国際会議場で開催されたWHO（世界保健機関）による経穴部位国際標準化会議（通称、つくば会議）により、361穴の経穴部位が正式に決まった（詳細は本誌第759号に掲載）。その後、WHO標準経穴部位公式本の出版に向けて作業を行ってきたが、2008年1月29日～31日、マニラのWHO/WPRO（西太平洋地域事務局）で開催された第4回WHO経穴部位国際標準化特別会議（第4回TFT会議）において、経穴部位表記、経穴図、ガイドラインなど、出版に向けての最終確認と合意が日中韓でなされた。ここでは、つくば会議以降の経緯と特別会議の内容、今後の展開などについて掲載する。

## I. つくば会議以降の経緯

つくば会議終了後、第二次日本経穴委員会作業部会が進めてきたのは、主に①正式な経穴部位の日本語翻訳、②部位に正確な経穴図の作成、③ガイドラインの翻訳と関連図の作成、④英語表記全体の校正、であった。

①については、英語表記に正確かつ自然な日本語になるよう心がけてきた。特に、「……方」、「……側」、「……縁」などの用法には苦慮した。②については、部位表記をもとに一穴に一図ず

つ作成した。解剖学的用語を挿入し、関連する経穴（横並びや取穴基準など）も図に盛り込み、細部にまでこだわって作成した。③については、経穴取穴決定のためのガイドライン、すなわち体表基準点や基準経穴、骨度法などについて関連する図もすべて作成した。④については、出版に向けて最終的な英語表記のチェックを行い、表記法の統一などをはかった。これらの作業は日本主導で行い、問題点などは中国、韓国の専門家とメールを中心としたやりとりを通して案をより具体化してきた。作業部会ではつくば会議終了後も約20回の会議を開催（うち4回は宿泊会議）し、7人の作業部会委員が各自のパートを担当しながら、会議で意見交換を行ってきた。そして昨年末、一応の雰囲が完成した時点で改めて中国、韓国に送り、各国の意見（反応）を待つこととなった。しかし、膨大な資料を前に円滑な意見交換には限界があり、やや滞りをみせたため、委員長の形井氏がWHO/WPROに打診し、特別会議として各国2人のアドバイザーによる特別会議が実現することとなった。

## II. 特別会議の意義と内容

経穴部位の国際標準化に向けては、2003年10月にWHO/WPROにて開催された第1回非公

式会議が皮切りとなった。その同じ場所で、原案作成から共にスクラムを組んできた中国、韓国 の専門家の参加を得て最終確認と合意がなされたことは意義深い。各国が抱えている事情は、日本とは比にならないほど複雑であるため、日中韓が同じテーブルにつけたことは大きな喜びでもあった。

特別会議の参加者（敬称略）は、日本側アドバイザーが、形井秀一（第二次日本経穴委員会・委員長、筑波技術大学教授）、篠原昭二（第二次日本経穴委員会・副委員長、明治鍼灸大学教授）、オブザーバーとして坂口俊二（第二次日本経穴委員会・書記、関西医療大学講師）、中国側アドバイザーが、黃龍祥（中国中医科学院教授）、譚源生（中国中医科学院副主任）、韓国側アドバイザーが任允卿（大田大学校鍼灸科助教授）、李昇徳（東國大学校鍼灸科助教授）であった。そして舵取りは、崔昇勲（WHO/WPRO伝統医学諮問官）が行った。

ここからは会議の経過と内容について列記していく。

会議初日は1月29日。各国の代表と宿泊ホテルで待ち合わせた後、5分程歩いてWHO/WPROに到着した。崔氏の出迎えを受けて会議室に入った。

開会式は、WHO/WPRO健康開発局局長のHenk Bekedam氏の歓迎挨拶で始まり、次いで参加者の自己紹介、集合写真と進み、最後に崔氏から会議の進め方が確認され終了となった。

本会議の大きな柱は、①経穴部位の表記確認、②経穴部位のイラスト確認、③経穴取穴のためのガイドラインの表記とイラスト確認、であった。まず、①については、崔氏から経穴部位表記に関する各国の意見を取りまとめた資料が準備されていたため、スクリーンに映しながら問



開会の挨拶をするWHO/WPROのHenk Bekedam氏（左）、中央が伝統医学諮問官の崔昇勲氏

題箇所について1カ所ずつ確認、意見交換、合意の順に進め、合意内容はその場で、崔氏自身がパソコン上で変更した。次に③のガイドラインについて検討した。これまでの非公式・公式会議の場で詳細な議論は行われていなかったため、日本側で予め検討した内容を報告し、それに基づいて追加や削除などが行われた。さらに、ガイドラインのイラストについては韓国側から詳細な指摘を受け、活発な議論がなされた結果、合意に至った。こうして会議初日は順調過ぎる程であった。これまでの10回の会議を通じ、予定通りスムーズに進行したことはほとんどなかっただけに、かえって嫌な予感がした。

会議2日目は、初日の議論内容を再度確認することから始めた。その後、②のイラストの議論に入った。WHO/WPROからの要請を受け、イラストを担当したのは日本であった。冒頭にも記したように約1年がかりで作成した自慢のイラストであった。肺經の中府から経穴部位とイラストを対比しながらのチェックが入った。ここで積極的な意見を述べたのが韓国の代表者であった。骨の形状、動脈走向、経穴位置など詳細にコメントがあり、それを一つずつその場で修正しながらの作業が続いた。今回その作業は篠原氏が担当し、筆者が紙面に書き込むとい

うダブルチェックを行った。形井氏は、これまでの日本側での議論を踏まえ、韓国・中国からのコメントに対し丁寧な説明を行った。会議の公用語は英語のみということで、コミュニケーションがうまくいかないケースもあり苦慮することも多かった。こうして14経絡中2日目に終了したのはたったの4経にとどまり、暗雲が立ちこめてきた。会議終了時間は午後5時に設定されているため、この後の作業はホテルでの作業となった。経穴イラストの表記原則の再確認をし、それに伴いイラスト原図を修正するだけで4時間も要してしまった。その後、夕食をとろうと外出したが、午後11時を回ったホテル周辺の店はほとんどが閉店で、ホテル内で遅い夕食となった。

会議3日目、最終日である。今日中に終わらせようとする思いは参加者全員が同じである。そして、何とか残り10経を会議終了間際に終えることができた。恥ずかしながらそのスピードについて行けない点も多々あり、形井氏、篠原氏に多くの迷惑をかける結果となってしまった。全日程を終え、中国の黄氏が、これまでの会議を振り返り、経穴を平面図に描く限界に触れながらも、経穴部位のイラスト化の日本の作業を高く評価してくれた。最後に崔氏から、総括が行われた。

最後の夜は、参加者全員が崔氏の自宅に招かれ、ご家族を交えての夕食会が催された。奥様の韓国・フィリピン料理とマニラ湾の夜景、参加者との談笑は何とも言えぬ喜びであった。

### III. 将来へのビジョン

崔氏は、将来計画として、今回の議論を踏まえて修正をした上で、公式本の発刊を今春に予定していると述べた。さらに、今後はWHO/



中国側アドバイザーの黄龍祥氏(左)と譚源生氏(右)



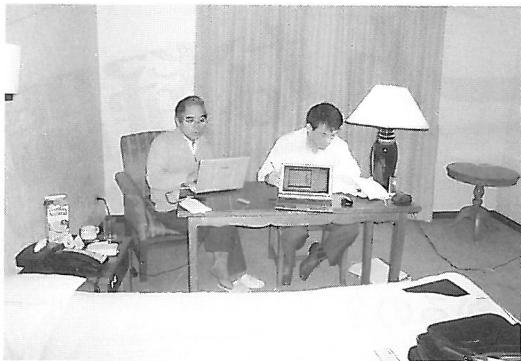
韓国側アドバイザーの李昇徳氏(左)と任允卿氏(右)

WPROとして中国・韓国とも協調しながら、経穴チャートや経穴人形の作成なども積極的にサポートしていく意志を示した。

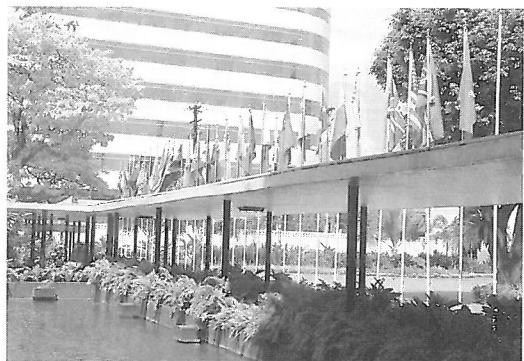
日本ではこれを受けて、4月下旬、遅くとも5月には、WHO標準経穴部位公式本ならびに日本語翻訳版の出版記念講演会ならびに祝賀会の開催を決定している。詳細は追って、第二次日本経穴委員会のホームページにアップする予定である (<http://point.umin.jp/>)。

### IV. 追記—WHO西太平洋地域事務局(WPRO)という場所—

WHOは6つの地域に分かれていて、それぞれに地域事務局がある。日本・中国などのアジア太平洋地域を管轄する西太平洋地域事務局 (Wes-



会議終了後、ホテルにて作業のまとめと翌日の準備が行われた



WHO/WPROに掲揚された国旗。WPROが管轄する国々の国旗が掲揚されていた

tern Pacific Regional Office : WPRO) が、フィリピンのマニラにある。今回、時間があれば崔氏にWPROがなぜマニラにあるのか、その背景を是非とも聞きたいと思っていたが叶わなかった。

WPROはマニラ市街の雑踏の中にあるが、周囲は高い白壁で覆われ、外からは緑の間に建物の「WHO」という文字が見える程度であった。正面入り口は人ひとりが入れる程のスペースで、入るには証明書が必要であった。扉を入れると身分を示すものを改めて提示し、許可証が初めて手渡された。その後、手荷物すべてのセキュリティチェックが行われ、ようやく敷地内に入ることができた。4階建ての白い建物で、エントランス前の左側にはWRROが管轄する国の国旗が掲揚され、その前は緑鮮やかな庭園となっていた。右側にはWPRO最大の会議場が建っていた。建物内部は白で統一され、とても綺麗であった。職員は400～500人で、そのうち2年以上従事する専門家は100人程度ということであった。伝統医学 (Traditional Medicine ; TRM) の専門家は崔氏を含め2人のみであった。にもかかわらず、TRMが推進する事業は膨大で、経穴部位標準化のみならず、医療情報標準化、鍼灸研究ガイドライン作成などもあり、用語標

準化については昨年、既に公式本が発行されている<sup>1)</sup>。

WPROの内部に戻るが、今回の会議はTRMを始め5つの健康関連部門が入るセクション内の会議室で行われた。会議室の隣が崔氏の部屋でその前には秘書があり、資料作成などには素早く対応してくれた。また、プロジェクトなどの調子が悪くなると、工具を持参した職員がすぐに駆けつけてくれた。昼は建物内のカフェテリアでバイキング料理をご馳走になった。野菜、果物はもちろん鶏肉など肉類もとても美味しかった。カフェテリア内では各国の専門家などの楽しそうな会話が飛び交っていた。また、建物内には医療センターや図書館、ATMなどもあり、充実した設備を誇っていた。職員の勤務時間は午前7時から午後3時30分で、実働8時間ということであった。ただ、2時間以上通勤に要する職員も少なくないようで、フレックス勤務も可能ということであった。建物の外と内のギャップがとても印象的であった。

#### 参考文献

- 1) World Health Organization Western Pacific Region, WHO International Standard Terminologies on Traditional Medicine in the Western Pacific Region, Manila, WHO, 2007.